因（カクダイ）佐賀家漁場起し船

VOL 99

留萌いま・むかし

福士広志
海のふるさと館
学芸係長
ふくし・ひろし
昭和28年生まれ。41才。
同58年留萌市役所入庁。
同60年より本稿執筆

鰊漁に使われた船は枠引き船の外は総て無動力船であった。建網にしろ、差網にしろ鰊という魚は音に大変敏感であったためという。江戸時代の江差では鰊漁期になると笛や太鼓の鳴物は総て禁止。浜での馬鹿騒ぎは処罰されたという。

このため、鰊の漁へは総て動力のついていない手こぎの船を使った。

まず建網のほうからいうと、建網一か統を経営するためには、用途からいうと枠船二艘、起こし船一艘、汲み船二艘、海陸の連絡に当る通い船一艘と最低でも六艘の船を必要とした。

枠船とは鰊漁の船の中でも一番大きく堅牢に造られた。この船は船の下に枠網という大きな網をぶらさげて、建網の網を起こしてくる側につけられる。そして、鰊が建網の中に入ると船頭の掛け声ともに、起こし船に乗った漁夫たちが一斉に網を起こし始める。そして、網起こしが枠船の近くにくると網側の枠の口をあけ、網の中の鰊をその枠網の中に流し込む。枠網が一杯になると、口を閉じ、建網からはなれ、待機していた別の枠船がそこにつく。つまり船底に鰊の一杯つまった枠網をぶらさげたまま、引き船に引かれて荷揚げ場まで引かれてくる。このため、鰊の重量を支えるためにも大きく堅牢に造られた。大きいものでは長さ十五メートル、幅三メートルを越えるものもある。主に保津船とか三半船がこれに使われた。

起こし船は枠船よりは小型であり、網起こしのために十数人の漁夫が乗り込み、船上で鰊の来游を待機するための船である。沖泊と称し、船の上で夜を明かすこともあった。また、この沖泊の枠船、起こし船と陸の間を往復して食事の運搬その他にあたったのが通い船という小さなふねである。これは磯船という現在でも使われている船が使われている。

また、枠船から陸への鰊の運搬へは海上で枠網から大たもで鰊を汲み船へすくい揚げ自分の場所まで運んだ。この船は平田船で喫水が浅く鰊を多量に積むことができた。

差網では川崎船を使うことが多く、これも無動力船であった。

これらの船は既にまったく見ることができなくなってしまった。しかし、もうすぐまた、礼受の因（カクダイ）佐賀家漁場で見れる日もくるであろう。